

## 519 漫録（「ジヨンブル」先生）

〔「法学新報」第28卷11（325）号 大正7年12月1日〕

## 漫録

## ○「ジヨンブル」先生

中央大学で、「ジヨンブル」の講義を聴いた学生は、其英國の事情に精通せると其明快な弁舌とは、実に面白く恍惚として二時間は如何にも短かい様に感じ「ジヨンブル」と云へば、何人もア……長谷川方文先生かと、直ちに想到するであろう、先生は英学界の宿儒で、早や耳順に立つせられるが精力壯者を凌ぎ

大の英国最賃で此時計は「ネルソン」会社のもので此眼鏡は倫敦の某店で買ったものだとか持物なり「スタイル」なり何も彼も英国で固められる、年齢から云へば、先生の英国は、四十年前のことで、自働車と云ふ字のない、電灯もない瓦斯の倫敦であつた頃だろうと、誰も思ふだろうが、所が決してそうではない、先生曰く

『私の外遊したのは高等商業の講師白耳義人ブロクホイス、外国語学校の講師英吉利人メドリーの両氏が、休暇を利用して歐洲に行くといふ話であるから、恰度善い連れと思ひ、語学の研究かたがた千九百十四年六月九日に日本を出発し、浦塩に上陸し西伯利亞を経由、ペトルグラードを通過して伯林に泊し、それから和蘭のフランシングを経、倫敦のヴィクトリアに著いたのは六月二十四日であつた。云ふ迄もなく二十四日は「アレキサンドラデー」で花の市場で、セラゼボのアーツリーヘルジナンドの暗殺された五日前である。自分はスコットランドに七週間許り滞在し此間ローレンス其他学者の家庭に這入り、専ら英國の事情を視察した』

其倫敦に著かれたのは、丁度歐洲大戰の始まる時であつて、親しく其実況を視られた

『私が倫敦に著いたのは六月の二十八日で、夕刻アーツリーヘルジナンドが暗殺された号外が出て、愈々戦争と云ふことになつたのは七月二十三日で、この日墺地利が塞耳比亞を砲撃したのである、開戦の理由は墺地利より申出たる条件の内に、塞耳比亞の承服出来ぬ二箇条があつた、それは第一に犯罪人を取調べ

るのに墺地利の法官を以てすると云ふことで、これは塞耳比亞の独立を害する、第二に陸軍の要路の人を免職すると云ふこと、其範圍は不明だが、是れ亦余程重大なことである、墺地利が故らに斯る無理な条件を提出したのは、始めから開戦の考で独逸の教唆に出づることは勿論である、それは塞耳比亞は露西亞の乾分で、露西亞の動くことは独逸の百も承知した上のことである、果せるかな露西亞は一部の動員を行つた、すると独逸は露西亞に向つて動員の撤退を迫り、之を聴かざるや墺地利亞と同盟せるの理由を以て八月一日露西亞に宣戦を布告し、同時に仏蘭西に向つて其意向を問ふた、仏蘭西は露仏協商の故を以て起つの外なしと答へたので、独逸は八月二日に仏蘭西に宣戦した、此時英吉利は仏、独、白に對し、同時に同様の文句を以て問ふて曰く「白耳義の中立を尊重するや否や」と、仏蘭西は直ちに普仏戦争当時の如く嚴重に遵守すると回答し、白耳義も亦無論守ると回答した、反之独逸は最後迄回答をしなかつた、茲に於て英政府は在伯林の英大使ゴスセンに訓令を發し、独逸政府の回答を催促せしめたるに、独政府は目下皇帝及び首相が不在だから、相談の上でなければ返答出来ぬと云ふことであつた、其後英大使から屢々催促すると、独政府の云ふのには、それは軍略に関する事だから、侵すか侵さないかは明言することが出来ぬと云つて之を断つた、丸で泥棒の様な言ひ草である、一方独逸は英吉利にさぐりを入れ、一旦は白耳義を蹂躪しても、戦後に於て白耳義の独立を回復し、白耳義の独立を保障するならば、英吉利は異論ないかと思ふが如何、又仏蘭西を蹂躪しても、領

土を合併せざる以上は英吉利に於て是れ亦不同意のなきことと思ふが如何と、仍て在伯林英大使は之に問ふて、仏蘭西の植民地はどうかと聞くと、独逸の云ふにはそこは何んとも云ふことが出来ないこと云ふことであつた、茲に於て英吉利の外相グレイは国会に向つて、普仏戦争當時に於けるグラッドストンの雄大なる演説を朗読し、我国の採るべき方針は當時の方針と毫も異らずとし、一は白耳義に対する義務責任、一は歐洲の西部に独逸の勢力が無限に増大することを防止する為め、即ち名譽と利害の二つの為めに起たざるを得ずと力説し、国会の同意を得て、八月四日の夜七時に、独逸に宣戦を布告し倫敦は夜の十時から戦争の状態になつた」

先生は間もなく帰朝されたが、歐洲大戰に付ては斯かる事情から熱心な研究者で幡ヶ谷邸の書齋には数十部の本やら地図やらを備へて余暇あれば其研究であつた、併しどうしても、聯合軍が勝つ、英國が勝つと主張し、今春独軍優勢で何人も巴里陥落を氣支ふた際にも……なかに一時の現象だ、今に見よと、極端に聯合軍の肩を持たれた、夫れで先生は

『初めロイドジョージが独逸は強敵である、想像以上の強敵である、之に勝つには国民の決心如何に因り即ち戦争の物資及人員の如何に因りて勝敗は分かれる、此事を等閑に付するとき其敗るるや亦明かである、其孰れを採るやは国民の決心如何に在りと明言したのは実に一大卓見と云はなければならぬ、其後ロイドジョージやウエルソンが独逸国民を敵とするにあらず、侵略主義を奉ずる独逸皇帝<sup>帝</sup>及び之を圍繞する軍閥官僚を討

伐するのであると力説したが、今日になつて見れば、独逸の国民や軍隊が、英米仏と聯合して、独逸皇帝及び之を圍繞する軍閥官僚を討伐したと同一の結果になつて居る、最初私は在英中、独逸が鉄砲を打ち始めたとき、独逸は戦闘に勝つて戦局に敗れると固く信じた、古来暴逆は決して正義に勝つた例がないからなのである、私は帰国の途中即ち熱田丸の船中で東大の人や京大の人と一緒になつたが、是等の人は固く独逸の勝利を信じて疑はなかつたが、是等の人人は今日になつて自分が船中で語つたことを臆出したならば、定めし自己の予想の見当違なるに呆れたであらう、私が独逸の戦敗を予言したのは感情から出たのではない、戦争に必要な統計的要素を調べて判断したのであつて、彼等が誤りを生じたのは「独逸過信」の四字で説明される、総て軍人学者等の独逸観は、皮想の見で且つ旧式で、歐洲の天地が年年歳歳変化しつつあることを知らざる為めである、私は元來独逸人は嫌いだ、いやにずうずうしくつて、形式的で、理窟張つて居る、世の中の事は論理一点張り、通るものではない、日本杯でも、随分独逸にかぶれ法律規則一点張りで行つて、やり損ふた実例は、最近にも沢山ある様だ……社会の根本問題が、未だ解決せられない今日、如何に正確な論理でも、それは沙上の樓閣である。詰まらぬ理窟は、言つたつてだめな話ではないか、英國では一つの法令を作るにも幾多の実例が固つて出来又此法令に依り判決があつて始めて其適用が明になるので……社会の事は、総て常識判断で行くからしては、夫れでこそ大なる間違が起らないのだ……今や独逸は全く敗れ其目的とす

る所一も達せず、世界統一の計画が全く水泡に帰した、其原因は頗る多いが（一）孫子に知彼知己。百戦不殆。不知彼而知己。一勝一負。不知彼不知己。每戦必敗とあるが、独逸は相手を蔑視し、外国民の心理状態を誤解したことで、是れは間諜政策の失敗に因るのである（二）其得意とする疾風迅雷主義が失敗したので、白耳義襲撃に少からず日を費したのでも分る（三）威嚇の軍略が敗れた、「ツエペリン」飛行船や飛行機を以て倫敦を襲撃したことや、商船の撃沈、白耳義の暴行等悉く失敗に帰し、僅かに露西亜に対する政策が成功したが、是は却て今では独逸の禍をなして居る、今後独逸はどうなるか……日本でも大に考ふべき事であろう、今日までは何も彼も、独逸独逸と云ふて居つたが、前云ふた学者軍人先生方も、今頃は漸く迷夢から醒めかかつて居るだらう、私は此際冷静に十分に英米研究に力を尽くして貰い度いと思ふ』

と先生は頗る意気軒昂であつた（一記者）